

# 興福寺の論義草奥書に みえる歴史

## —戦国時代南都の飢饉・一揆・武将—

はじめに 歴史研究室では興福寺所蔵典籍文書の調査を進めており、2008年度には『興福寺典籍文書目録』第四巻を刊行した。論義法会が盛んな興福寺の性格を反映して、論義草を多く含むが、その中には、歴史学の史料としても注目すべき記述も存在するので紹介する。

第79函・80函は、冊子本の論義草を納める。その大部分は、江戸前期の寛文～延宝年間に、信雅・真敬が他筆により書写させ、表紙のみは自筆で記したものと思われる。今回取り上げる①②③の3冊もその一部である。①②の末尾には彼ら自筆の奥書があり、②③の表紙左下には「信雅」と記す。これらは、元来別巻だった複数の論義草を1冊にまとめて書写している場合が多く、①は前半は顕範の草、後半は草主不明。②は前半は訓専、後半は好胤の草。③は前半は草主不明、後半は好胤の草だろう。以上の草者、また書写者として本奥書に見える盛賢・善芸院はいずれも、他の興福寺典籍にも見え、中世の興福寺僧である（第60・79・80函、72函30号等参照）。中世の書写を経ているので、その書写本奥書には、右頁に掲げたように、中世の興味深い事実が記されている。

①永正元年(1504)本奥書 ①の巻末には、永正元年6月10日付の長大な書写本奥書が存在し、前年の文亀3年(1503)以来の旱魃・一揆・疫病等が生々しく記録されている。要点を記すと、文亀3年は5月以降雨が降らずに旱魃となり、8月より馬借が蜂起して四方から奈良を攻め、福寺をはじめ、眉間寺・天神宮等を焼いた。冬は厳寒で、年が明けた2月には大雪が降り、物価は騰貴し、餓死者が多く出た。般若寺・眉間寺・白毫寺には足の踏み場もないほど、路頭にも数知れず、また井戸堂・長原・丹波にはそれぞれ50～100人ほど、他の郷々里々にも数え切れないほどの餓死者が存在した。4月中旬からは疫病が流行して病死者が多く、葬送の念仏が絶えない。筆者の感慨としては、一天こぞって一向宗となつたために、神がいさめたのだろうか、と最後に書き付けている。

これは極めて生々しい記述である。文亀3年の土一揆は既知の史料でも法隆寺文書に見え（神田千里『土一揆の時代』吉川弘文館、2004年、19頁）、また9月頃に徳政が実施されたことは知られていたが（中村吉治『土一揆研究』

校倉書房、1974年）、判明する事実が断片的だった。①はその全体像を述べる貴重な記録である。馬借が「堂塔悉焼」いた福寺とは、現存しないが、『大乘院寺社雜事記』では「藤家氏寺三個内」と言われた寺院だった（明応7年3月19日条）。場所は奈良市南京終町5丁目に戦後まで存在した福寺池附近に比定されている（現在は石碑が立つ。山田熊夫『奈良町風土記』豊住書店、1976、肘塚南方町・肘塚新町条など）。それ以外の眉間寺（奈良市法蓮町聖武天皇陵附近）、天神宮（奈良市高畠町天神社（天満神社）カ）も奈良の周縁にあり、馬借が外から奈良を攻めていた様相が窺える。今回の土一揆は法隆寺文書からも、南都や法隆寺に徳政を要求した主体が「大和惣国百姓等」だったことが判明する（『大和古文書聚英』天理時報社、1943、146号）。一揆の内実には更に検討の余地がありそうである。

翌永正元年にかけての飢饉も、全国的には著名だが、<sup>〔特〕</sup>大和国については従来、「天下飢饉、餓死多、和州時多死」等の記事から窺える程度だった（「続南行雜錄」所収「二条寺主家記抜萃」、『日本中世気象災害史年表稿』高志書院、2007年）。今回初めて、その悲惨な実態が明らかとなった。奈良周縁の律寺である般若寺・眉間寺・白毫寺や（松尾剛次『中世の都市と非人』法藏館、1998）、農村地帯の井戸堂（天理市東・西井戸堂町）・長原（天理市永原町）・丹波（天理市丹波市町）の惨状を生々しく描写する。

またこの点、年輪年代法で用いるヒノキの年輪幅と対照させてみると、光谷拓実作成の標準パーソングラフでは、1503年は順調に生育しているが、1504年は生育が極めて悪い（奈良国立文化財研究所『年輪に歴史を読む』1990、64頁）。米延仁志等によると、ヒノキの生長は春先（太陽暦で2～4月）の気温と相関が高いという（Yonenobu,H.,and D.Eckstein (2006).Reconstruction of early spring temperature for central Japan from the tree-ring widths of Hinoki cypress and its verification by other proxy records,Geophys.Res.Lett.,33,L10701）。①では、永正元年（1504）は春も寒く2月に大雪が降ったとあるので、年輪との相関関係を考える参考になるかもしれない。

①の筆者は、この天災の原因を、一向宗の浸透に求めている。奈良で一向一揆が起きるのは天文元年（1532）だが、興福寺による一向宗の禁制は、長禄2年（1458）にはすでに記録されている（神田千里『一向一揆と真宗信仰』2頁、吉川弘文館、1991）。①からは、一向宗の浸透と、そ

① 第九識牘顕範 奥書 (第八十函 144号)

写本云  
永正元年六月十日、当坊毎月講用書之、

写本大急之間、速疾書之畢、願者值遇

大明神、二親得脱、自他法界平等拔苦矣、

写本云  
一文亀三年癸亥五月廿日雨已後、至八月一同早天之

間、諸人愁吟重過也、然間興福・東大両寺、殊諸

寺・諸山、祈雨繁事沙汰在之、雖然少雨更不下、

一天之早損前々重過同年八月ヨリ馬借蜂起

而日々夜々從四方責奈良、路次悪事超言者也、則

カリ田以外也、就中福寺馬借乱入、則堂塔悉

焼畢、同眉間寺・天神宮、其外墓所率<sub>〔卒〕</sub><sub>〔斯〕</sub>都

婆・経樓已下焼払廻、雖末世澆季、如期事理

運眼前凶段、言語道断歎而尚有余也、兼又

冬月嚴寒、久年更無比類、春三月同寒風、即

二月中旬大雪下、是又凡事也、然而分去年

依炎早<sub>〔早〕</sub>買責<sub>〔壳力〕</sub>類一向無不令高、去程土民百

姓等、望飢餓死重過也、諸人拳云、般若・眉

間・白毫之死人無足踏跡<sub>〔云々〕</sub>、其外辺土路頭

骸死不知數、則當時口遊云、井戸堂一里飢

死五十六人、長原九十四人、丹波六十二人、其外郷々

里々算數不及也、凡去來之暮露衆多也、次又

四月中旬比始六月至、疾病倍、家而死人二

三四五無不<sub>〔候力〕</sub>之、入行鐘声書夜六時不止之、亡失胸

之涙、無被于人荼毘、葬送之念佛家而無不唱之、

誠催哀勞之思慮、增自心懺悔之少意期時也、

推之、一天拳成一向衆、諸業惣增罪法矣、

尊神驚諷之故歟、

〔別筆〕  
〔延宝六年八月日〕

(以上本奥書)

不注之、六月十日

② 無記五識好胤 奥書

(第七十九函 125号)

天文十五年丙午卯月五日写之畢、昨日四日、為筒井順昭

沙汰、十市方依有不義之子細、數多之人勢下彼

領地、悉以處闕所畢、諸給人等過半為他国人

之間、寺門領等雖及届可致押領歟、一寺之愁

歎不可過之者也、

なか、れとなにおもひけむ世の中の

うきめを見るはいのちなりけり

〔別筆〕  
〔寛文十年七月日〕

専勝房

盛賢

(以上本奥書)

③ 果上許縁好胤答 奥書

(第七十九函 118号)

右一帖書写之事、近者來下問講問出仕之用、遠者為

佛子<sub>〔縁力〕</sub>卉之<sub>〔縁力〕</sub>糧因之也、爰仁曲事<sub>〔日損〕</sub>云去年ト當年ト云

越常篇、土貢之事全<sub>〔三〕</sub>無足、諸人之悲歎為此期、如今者

寺住之儀難統者也、從而希代者、去月廿五日初夜半時

ヨリ、當社大明神拝殿御内之物<sub>〔託〕</sub>託宣シテ曰、當國上下之

面々意樂惡候間、從去年六月廿六日武家<sub>〔ヲ〕</sub>許容、或<sub>〔ハ〕</sub>日損ト

云々、乍去慈悲万行之貴<sub>〔ハ〕</sub>可有哀愍納受<sub>〔ト〕</sub>御神託<sub>〔也〕</sub>也、

末世乍云、何<sub>〔ヲ〕</sub>疑可申哉、此外種々之御託<sub>〔託〕</sub>也、別紙仁一々<sub>〔ニ〕</sub>注之

時刻之事、初夜半時<sub>〔ヨリ〕</sub>九ツ半時迄之御神託<sub>〔託〕</sub>也、難有々々、

及當時者三百年モ御<sub>〔託〕</sub>者無之事也々、諸共<sub>〔也〕</sub>、

于時永禄三年庚申六月五日、即爾書之、

重而六月六日之夜御<sub>〔託〕</sub>託也、

求法沙門善藝院

(本奥書)

れに対する興福寺僧の思いを読み取れる。

② 天文15年(1546)本奥書 ②の天文15年4月5日付の書写本奥書によると、4月4日に筒井順昭が十市方に下向し、彼らの領地を没収したという。給人は過半が他国人なので、筆者は寺門領の押領を心配している。

この時期は、大和に侵入した木沢長政の死後にあたり、筒井順昭が勢力を伸ばしつつあった。8月に十市藤勝は竹内城を攻めるが敗北し、9月に自らの城を抜けて吉野に逃れ、筒井順昭が占領している(『奈良県史11大和武士』名著出版、1993)。②は、そのような十市氏没落に至る事情の一端を示すものだろう。

③ 永禄3年(1560)本奥書 ③の永禄3年6月5日・10日付の書写本奥書では、次のように述べる。去年・当年続いて旱魃で、年貢が入らず寺住も困難な折、5月25日夜に春日社の者に託宣があった。国内の者の行ないが悪いので、永禄2年の6月26日より武家を許容し、また旱魃となった。しかし慈悲深く憐れみを垂れるだろうとの神

託だった。続けて6月6日夜にも、様々な神託があった。

この時期、三好長慶の配下にあった松永久秀は、永禄2年8月に大和に侵入し、筒井順慶や十市遠勝(藤勝を改名)らと戦ってこれを破っている。永禄2年には信貴山城を修築し、永禄3年頃から、奈良の北側、眉間寺の地に壮麗な多聞城の建設を開始し、大和国の支配者となる(『奈良県史11大和武士』前掲等)。③からは、旱魃や松永の大和侵入に対し、興福寺側が不安な状態でいた様子を窺い知ることができるだろう。

おわりに 戦国時代、大和の諸勢力は合従連衡を繰り返し、他国勢力も盛んに侵入する。その過程で興福寺権力は衰えていくが、①②③はその節目節目を、興福寺僧の立場から書き留めた史料と評価できる。また、旱魃・疫病等の天災が、社会・政治に大きな影響を与えていた様相も読み取れて興味深い。

(吉川 聰)

本稿を成すにあたっては、綾村宏・大河内隆之・高橋大樹・萩原大輔・水谷友紀・山田徹の各氏のご教示を得た。